



# 一月 自主公演能

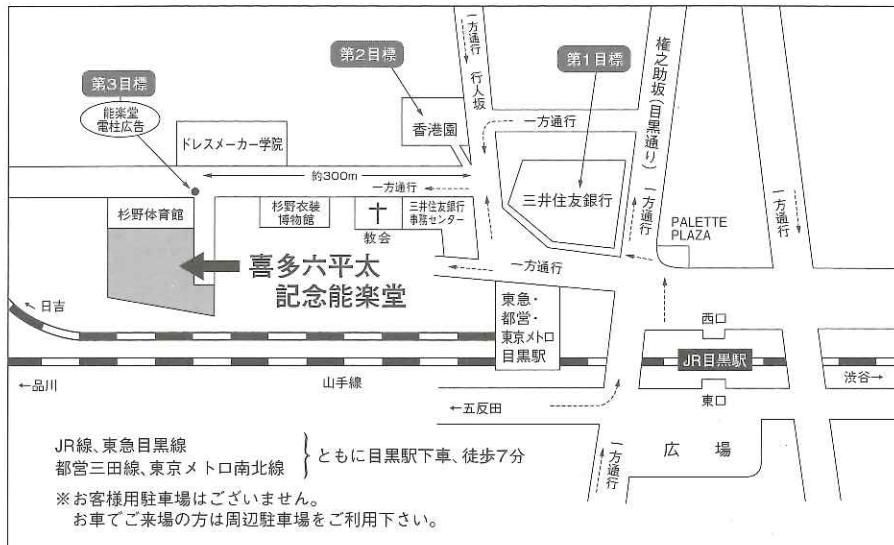
平成二十六年

ところ 平成二十六年一月五日(日)正午始  
とき 《整理券配布・十時三十分、  
見所入場・十一時》



平成二十五年度文化庁文化芸術振興費補助金  
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

【会場案内図】



T-141-0021

東京都品川区上大崎四一六一九

十四世喜多六平太記念能楽堂

電話(03)三四九一一八八一三  
ファックス(03)三四九一一八九九九

主催 喜多流職分会

後援 公益財團法人 十四世六平太記念財團

## 『チケットのご案内』

一月チケット発売開始日

平成二十五年十一月二十四日(日)午前十時より

### 年間優待券

- 十一枚綴り 五〇、〇〇〇円
- 五枚綴り 二五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

### 前売券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円
- 学生団体(100名以上) 二、〇〇〇円

### 指定席料 二、五〇〇円

### 当日券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円

(午前十時～午後六時)

十四世喜多六平太記念能楽堂事務局  
(電話) 〇三一三四九一一八八一三

## 『お取扱い』

窓口とお電話にて承っております。

(FAX及びメールでのお申し込みは  
お受けしておりません。)

平成二十六年  
**二月自主公演能予告**  
平成二十六年二月二十三日(日) 正午始  
十四世喜多六平太記念能楽堂

「月宮殿」 高林白牛口二  
「東北」 粟谷浩之  
「野守」 長島茂

二月チケット発売開始日  
平成二十六年一月五日(日)  
午前十時より

### 【ご注意】

\*喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従つていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。

\*2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。

\*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券順に見所へ入場していただきます。

\*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。

\*座席はお一人様一座です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席

を取り置く行為は固くお断り致します。

\*公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。

\*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。

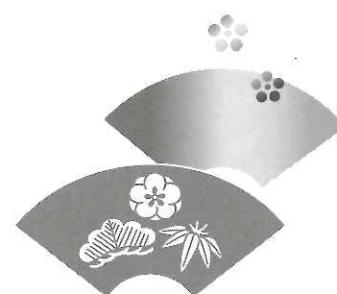
\*やむを得ない都合により出演者が変更になることがあります。

\*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。

\*お客様用駐車場はございません。お車でご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。

\*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難、紛失につきましては一切責任を負いかねます。

\*「翁」演能中の入退場はご遠慮ください。



# 一月自主公演番組

● 平成二十六年一月五日(日) 正午始  
● 整理券配布・十時三十分、見所入場・十一時

## 翁

栗谷充雄

千歳 中村修一  
三番叟 高野和憲

大鼓 佃 良太郎  
胴脇 住駒充彦  
小鼓 曾和正博  
手先 森 貴史

笠井 陸  
栗谷 稔雄  
栗谷 能夫

佐藤章雄  
大村 定  
栗谷能夫  
栗谷明生

後見 内田安信  
高林呻二

塩津圭介  
内田成信  
狩野了  
大島輝久

佐藤章雄  
大村 定  
栗谷能夫  
栗谷明生

## 狂言

### 末広かり

シテ・果報者

野村万作

アド・太郎冠者  
小アド・すっぱ

石田 幸雄  
岡 聰史

休憩 二十分

## 仕舞

## 田村

キリ

友枝昭世

地謡

笠井 陸

栗谷 稔雄

栗谷 能夫

栗谷 明生

# 竹生島

後シテ連・辨財天  
前シテ連・女  
後シテ・龍神  
前シテ・漁翁

佐々木多門 中村邦生

ワキ連・従者 矢野昌平	大鼓 佃 良勝	太鼓 林 雄一郎
ワキ・臣下 福王和幸	小鼓 大倉源次郎	笛 栗林祐輔
ワキ連・従者 村瀬 提		

アイ・明神の能力 竹山悠樹

後見 高林白牛口二	友枝真也	谷 大作
塩津哲生	金子敬一郎	出雲康雅
	友枝雄人	香川靖嗣
	粟谷浩之	長島茂

## 地謡

友枝真也	谷 大作
金子敬一郎	出雲康雅
友枝雄人	香川靖嗣
粟谷浩之	長島茂

(終了予定三時過頃)

## 《翁(おきな)》

他曲とは別格に扱われ、形式が全く異なり天下泰平、国土安穏、五穀豊穣を祈る神事として行われ、戯曲的な構成は全くない。初めに〈翁渡り〉といい、千歳、翁、三番叟につづき、素襪、侍鳥帽子の最高礼装の囃子方、後見、地謡方の順に出て、正面先で翁は拝礼をする。拝礼の間は三番叟以下は橋掛で下に居て待つ。拝礼の後に翁が座に着くと一同所定の位置につき、まず笛が吹き出し、続いて三挺の小鼓が打ち出す。翁の謡出しにつづき、千歳が舞いを始める。その舞の間にシテの翁は白式尉の面(切顎という顎のところで二つに分かれ、飾眉を貼り付けた他にない特色。また目をへの字にくりぬき笑みと福顔をたたえている)をつけ終わり、舞台に立ち出た翁は祝詞を述べて莊重な翁の舞となる。舞終わると面をとり、拝礼をして退場する。これを〈翁帰り〉という。この後三番叟の舞となり、始めに面をつけず、掛け声を掛けながら

ら舞う〈揉の段〉を舞う。その後黒式尉という面をつけて鈴を振りながら舞う〈鈴の段〉を舞い、その舞の後、面と鈴を置き退場し、演奏がおわる。

## 《末広かり(すえひろがり)》

ある果報者(富豪)が祝宴の来客への進物用に末広がり(扇の一種・中啓のこと)を買い求める為、太郎冠者を都へ使いにだした。末広がりが何なのか知らない太郎冠者が「末広がり買おう」と都大路を呼び歩いていると、都の売り手(詐欺師・すっぱ)に呼び止められる。太郎冠者を田舎者と見た売り手は、言葉巧みに太郎冠者をだまし、傘を末広がりと偽つて売りつける。高い値で傘を買って帰った太郎冠者は主人に厳しく叱責されるが、売り手が主人の機嫌が悪い時に囃せといって教えてくれた囃子物を思い出し、「傘をさすなる春日山……」と拍子面白く舞を舞う。怒つていた主人の機嫌もしだいに直り、ついに浮かれだして、主従仲良く謡

## 《竹生島(ちくぶしま)》

ある日、醍醐天皇に仕える臣下が竹生島に参詣に出掛けようとして琵琶湖畔に着くと、漁翁が若い女を伴つて釣船を出しているので、それに声を掛け同乗させてもらうよう頼む。漁翁は快諾し、のどかな春色の湖上の景色を楽しみながら竹生島に着く。臣下は漁翁の案内で竹生島明神に参詣しようとするが、若い女もついて来るので「この島は女人禁制と聞いているが……」と不審があると、竹生島に祀つてある弁財天は女体の神であると語り、女は社殿の中に、漁翁は波間に姿を消す。(中入)やがて、社殿が鳴動し弁財天が現れ、華やかで上品な舞をする。そこへ突然、湖上が波立ち見ると龍神が水中から現れ、臣下に金銀珠玉を捧げ国土鎮護を約束し、弁財天は社殿に、龍神は水中へ消え去る。